

## 閉会挨拶

勝田 今日本当に長時間おつき合いくださいますとどうもありがとうございました。今日の講演の部分では、最初、上空からの圃場の写真から始まった話が、最後は分子メカニズムとなりました。農研機構を中心とした麦、大豆の耐湿性研究はこのような形でやっておりますということで、ご自身のお仕事から最新の到達点のご紹介をさせていただきました講演者のみなさん、ありがとうございました。また、本日ご参加いただきましたのは、大学、公設の農業試験場の皆さん、それから普及指導関係の皆さん、さらに独立行政法人の研究者ということで、それぞれからはほぼ同数の方々にお集まりいただきました。このように各現場で湿害に関わる関係者の皆様とともにこの課題の議論をスタートすることができたことが何よりの成果であったと私たちは思っております。

封筒の中にアンケート用紙を同封させていただきましたので、もしまだお時間がありましたらぜひそこにご感想などを記入の上、受付の箱に入れてお帰りいただけたらと思います。

それでは今日は本当にご苦労さまでした。ありがとうございました。

## 編集後記

この冊子は、平成 22 年度農研機構シンポジウムの 1 つとして作物研究所が、日本作物学会、日本育種学会、根研究会のご後援を受け、平成 22 年 12 月 7 日に東京大学弥生講堂一条ホールで開催したシンポジウム「麦・大豆栽培における湿害の現実と研究展開 ―水田高度利用に向けた耐湿性の生理・遺伝研究―」の講演の内容をまとめたものです。シンポジウムには研究機関だけでなく、行政、農業普及の現場など、各方面から総勢 160 名を超える方が参加しました。湿害という問題の大きさ、関心の高さを示すものとなりました。

シンポジウムを企画するにあたっては、栽培技術サイドだけでなく作物開発サイドからも研究の最新情報を発信するプログラムとしました。また、参加者の顔ぶれから、研究と現場をつなぐことを意識した総合討議を行ないました。会場からは、数多くの意見が出され、活発な意見交換が行われました。その内容は、湿害に直面する関係者であれば誰もが持つ問題点、疑問であり、共感できる話が多かったのではと考えております。

しかし、ここで述べるまでもなく、湿害の発生には多くの要因があり、また、圃場の管理方法、作物の耐湿性と栽培方法によって、湿害の被害の状況は大きく影響を受けます。そして、湿害という課題に関わる方々の、問題の見方や取り組み方も多様です。講演の話題の内容が圃場から分子まで多方面にわたりすぎ、1 つの話題をもうすこし深くお聞きになりたかった方もいらっしゃるかもしれませんが、残念ながら、1 つのシンポジウムだけで、湿害の全ての面を深く掘り下げることはできません。総合討議の話題にもありました

が、湿害の切り口の多様さを受入れて湿害の研究を継続することで、その被害の軽減、克服という目標に向かっていくこと、そのための（再？）スタートとなれば、この会は大成功であり、そうであることを願っています。

終了後に記入いただいたアンケートには、おもしろかったというたくさんの声と、今後も湿害研究と、その情報交換の場の継続を望む声が多く出されました。どうもありがとうございました。

### 報告書作成上の留意点

この報告集は、当日のテープ起こしを改めて編集し、読み手が当日の会場に参加していなくても、講演やその後の議論の内容ができるだけ理解できるようにとの考えで作成されています。例えば、文章として読みやすいように、話し言葉では多用される繰り返しを削除したり、理解を助けるために新たな文章を追加したりしました。また、議論の中で出された話題に関連して、当日は触れられなかった事項について編集部注として後から付け加えた部分もあります。読みやすさと同時に、現場の雰囲気伝えることにも配慮しました。このような編集作業には十分に気をつけているつもりですが、話し手の意図やそのニュアンスが改変されてしまった部分があるかも知れません。これらの責任の全ては編集者にあります。以上をご理解の上、今後の湿害、耐湿性研究の発展のためにご活用いただければ幸いです。

農研機構作物研究所研究管理監

勝田真澄

### 追記

本掲載内容は、平成 23 年 3 月に作成した冊子を元に、ホームページ掲載用に、再編集したものです。

平成 23 年 9 月